

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 10 月 26 日現在

機関番号： 9 9 9 9 9
 研究種目： 奨励研究
 研究期間： 2020 ~ 2020
 課題番号： 2 0 H 0 0 7 6 1
 研究課題名 北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動

研究代表者

戸川 貴之 (Togawa, Takashi)

北海道帯広柏葉高等学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要： 高校生はアイヌ民族の文学作品に対し、大変深い興味を持って向き合うことがわかった。創作活動は主体的にアイヌ民族の文化を学ぶようになるための活動として大変有効であることもわかった。また、アイヌ民族の文学作品について、日本語による記録や動画による記録は残っているが、多くの人はその存在を知らず、それに対して興味を持つようになるための働きかけは不足している現状があることがわかった。この現状を改善するためには、国語科の教科書に日本国内の言語文化の一つとしてアイヌ民族の文学作品が載ることが必要であると考えているに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アイヌ民族をはじめとする国内の多民族の文学作品を学校教育で扱うことには重要な意義がある。それらが公教育できちんと取り上げられていない現状は改善されるべきである。そうすれば、当該民族がそれらを教材として学ぶ機会ができることはもちろん、当該民族以外の者であっても、その文学作品を学ぶことは、当該民族の存在を認知し、互いに尊重しあう姿勢を醸成することにつながる。アイヌ民族の文学作品は、日本語の文字や動画によって記録されている。それらの存在を知り、手に取り読もうという気持ちを持つ人を増やすためにも重要なことである。

研究分野： 高等学校国語科教育

キーワード： アイヌ民族 高等学校 国語科 言語文化 多文化共生 ユカラ ウェベケレ

1. 研究の目的

平成 30 年告示の高等学校学習指導要領においては、資質・能力の 3 つの柱に沿った再構成が図られた。従前の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、(1) 言葉の特徴や使い方にに関する事項、(2) 情報の扱い方にに関する事項、(3) 我が国の言語文化に関する事項からなる「知識及び技能」となった。本研究で取り上げるのは、この内、「我が国の言語文化」についてである。

アイヌ民族の文学作品を学校教育で扱うことについては、佐野(2018)において次のように確認されている。

アイヌ民族の文学を読む学習活動は、文化の表層を知るのみならず、アイヌ民族の文化の中に込められた魂を感じることができる学習活動であり、ひいては、在りし日の北海道の姿を忘れないことにつながり、この地に生きる人々への畏敬の念を学習者が持つのに非常に有効な実践である。

全国大学国語教育学会ラウンドテーブルでは、この記述をもとに議論が交わされ、アイヌ民族の文学作品を学校教育で扱うことについての様々な可能性について確認された。

かつて、戸川(2018)では、北海道の先住民族である「アイヌ民族」の言語文化を扱った国語科教材や実践の少なさに触れたが、この現状は 2023 年においても未だ改善されていない。

もちろん、北海道の教育現場でも小中学校を中心として、アイヌ文化の生活や祭事についての学習は行われており、学習者は体験を通して異文化理解を深めてきてはいる。その一方で、アイヌ民族の思想が込められた「物語」については、検定済教科書の使用を優先する教育現場においては、ほとんど取り上げられることはないのである。

近年、グローバル化が進む中で、異文化理解、多文化共生の重要性が指摘されることも多くなった。その際、とかく、国外に視線が向きがちであるが、北海道においては、尊重すべき異なる文化を持つアイヌ民族が今なお生活を営んでいる。北海道に生きる者は、自らはアイヌ民族でなくとも、アイヌ民族を同じ北海道に住まう隣人とし、その文化に対する関心と理解を深めるべきであると考えらる。

口承伝承によるアイヌ民族の物語は、年を経るとともにその語り手を失い、衰退の一途を辿っている。それらに含まれる寓意の真意を理解することも次第に難しくなりつつある。反面、金田一京助と知里幸恵らによって生み出された「アイヌ神謡集」を皮切りに、知里真志保の「アイヌ文学」、萱野茂の「アイヌ童話集」、北原次郎太の「ミンタラ」など、多くの研究者の努力によって、日本語を主な媒介とした口承伝承の文字による保存と伝承は進められている。さらには、公益財団法人アイヌ民族文化財団が、アイヌ語音声と日本語字幕を含めた各国の字幕で聴くことができる動画を作成し、それを YouTube にアップロードしてもいる。

これらが学校現場において活用されてこなかった背景には、旧土人保護法に端を発するアイヌ民族に対する同化政策と、今なお残る深刻な差別や略奪の歴史に起因するアイヌ民族の怒りに対する配慮と畏れが込められていることは容易に推察できる。しかし、多文化共生を掲げる現代社会がそのままでいいはずがない。北海道の学校教育現場が率先して、その先駆けとならなければならない。

2. 研究成果

(1) 授業実践

「『さけが大きくなるまで』を高校生と読む」実践

この実践は帯広北高等学校特進コースを中心とした 11 名の高校 3 年生の学習者と、小学校 2 年生の教科書に収録されている「さけが大きくなるまで」と言う教材を、高校 3 年生の視点から読み返したとき、新たな気づきを得るとともに、より幅広い学びを共有する場を創出することができるのではないかという仮説を検証する目的として行った。その際、教師がいくつかのプロジェクトの例を提示した。そのうちのひとつとして、アイヌ民族にとっての鮭に対する考え方がわかるような物語を 3 編、日本語の文章で提示した。提示した物語は、アイヌ民族の鮭を取るとき、の習慣、鮭が来なかった時にどれだけアイヌ民族が困ったかをはじめ、様々な要素が擬人化された鮭の口を介して語られたものであり、アイヌ民族にとって鮭がどれほど大切なものが雄弁に語られたものであった。このとき、教師からは物語の提示のみで、文化の説明についてはほとんど行わなかった。

その結果、このプロジェクトに興味関心を持った生徒が「アイヌ民族にとっての鮭とは」と言う観点でプレゼンを行った。その生徒たちは、インターネット上のデータを中心に情報収集し、物語にあったアイヌ民族の考え方と実際の自然現象や実態と結び付け、大変わかりやすく正確にアイヌ民族にとっての鮭についてまとめた資料を作成した。

それは、高校 3 年生段階の生徒の情報収集能力、情報整理能力の高さがあればこそその成果であったといえと同時に、この実践における生徒の活動の様子をみとることによって、単なるアイヌ民族の文化に対する説明を教師からするのではなく、文学作品を用いることで、文化の前に語り手の感情があり、その感情のもととなる文化を探究したいという興味関心をより強く喚起

することができることがわかったといえる。

「物語創作」実践

本研究では、平成 30 年告示の高等学校学習指導要領において、文学国語の中に「物語創作」の学習活動についての記述があることを動機に、高等学校における物語創作の効果を活かした実践の構築とその効果の検証を目的の一つとしていた。

高校 3 年生に YouTube の動画、「トドのシラミ」と言うアイヌ民族の文学作品を視聴させて、生徒自身が疑問に思ったこと、気づいたことなどをきっかけに、アイヌ民族の文化について調べ、その内容をもとにしたアイヌ民族の物語風の小説を創作する活動を行った。

公益財団法人アイヌ民族文化財団が YouTube にアップロードしているアイヌ民族の物語は、デフォルメされた可愛い絵によって表現された主人公たちによって描かれており、アイヌ民族の文化について理解が浅いものであっても、大変わかりやすく物語に親しみやすくなっている。中でもアイヌ語音声日本語字幕によって語られる物語は、実際のアイヌ語の雰囲気が伝わって非常に良い刺激になる。

このとき、創作活動を行う際に物語の基本構成の指導に加え、アイヌ民族の物語に寄せた作品にするために工夫した事は、登場人物名、地名をアイヌ語のものにすることであった。ただそれだけのことであるが、アイヌの名づけは、日本語以上にその物や人に対する「意味」と強く関連させて行われる。よって、こうすることによって、読み手がイメージする人物像をアイヌ民族にすると同時に、書き手がアイヌ民族の名前や、その意味するところからそれに関連した活躍や設定を用いるために文化を調査する姿勢を喚起することができるのである。

(2) フィールドワークにより明らかになったこと

アイヌ民族の文学作品について現状の把握と理解を深めるために、参考文献を収集するとともに、北海道各所のアイヌ民族に関する資料館に直接足を運び、その地に生きるアイヌ民族の文化がどのようなものであったか、探る活動を行った。

その中で、アイヌ民族に関連した集会や講演、活動に参加することでアイヌ民族の方やその方が運営する団体と交流の機会を持つことができた。そこから、現代に生きるアイヌの方々が抱える問題とそれについて、我々はどうしていくべきなのかを考えるきっかけを得た。

これらの施設のほとんどは、アイヌ民族に関する文献は多数あるが、奥の書棚にあり、それを手に取ったりそこに足を運んだりする者は特別な興味関心を持ったものに限られる。

これらの地域を回ること、地域の物語はその地域の自然の特徴を表しており、それは現在の北海道の姿とは違うものである場合もあることがよくわかった。鮭が遡上してくる川や密林は今ではその姿を消している。川沿いに山を越え、数百キロ離れた場所と交流を行う文化と技術についても現地を見ることでその過酷さを感じるとともに、その必要性は何だったのかと考えさせられることもあった。

北海道で暮らしたり、旅をしたりする際に、あらかじめその地のアイヌ民族の物語に触れてから、その文脈知っておくことは、その人の人生をより豊かなものにすることを確信した。

(3) まとめ

アイヌ民族の文学作品は、研究者、有志、行政の手によって、大変多く残されていることがわかった。また北海道内関係各所の施設をめぐることによって地域に大変多くのアイヌ文化を学ぶための拠点があるということもわかった。しかし、私のような目的を持ってめぐるからこそこのような関係書籍を発見できたが、私自身のことに鑑みても実際にこの研究を始めるまでそのような書籍があるということすらわかっていなかった。また、学会発表の際に、西日本ではアイヌ民族の存在すらはっきりと認知されていない現状があるという情報も得た。

これらの問題を我々がもっと強く自覚するためには、情報がただそこにあるというだけではなくその施設とつなげる役割を持つ人や組織、活動が必要である。

また、アイヌ民族の文化に造詣が深くない現代の学習者がアイヌ民族の文化に対し主体的に向き合う動機づけとして、創作活動は大変効果的であることもわかった。

そのためには全員が学ぶ国語科の教科書の一領域に各民族の文学作品について学ぶための教材が配置され、単元が設定されることが重要であると考えた。その教材選定においては各民族の意見を聴くことが重要であり、そうすることで各民族を尊重する社会にむけてまた一步を踏み出すことができるのである。

参考・引用文献

- ・佐野比呂己 (2018) 「多文化共生社会を基底とするカリキュラム構築：アイヌ文化を国語科に」(全国大学国語教育学会第 135 回東京ウォータフロント大会ラウンドテーブル 2018.5)
- ・戸川貴之 (2018) 「北海道の先住民族であるアイヌ民族の文化をもとにした創作活動：作品に寓意を込める」(全国大学国語教育学会第 135 回東京ウォータフロント大会ラウンドテーブル 2018.5)

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1．著者名 戸川貴之	4．巻 140
2．論文標題 アイヌ民族の物語を高校生と読む実践	5．発行年 2021年
3．雑誌名 全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集	6．最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/jtsjs.140.0_69	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 戸川貴之	4．巻 24
2．論文標題 アイヌ民族の物語を高校生と読み創作活動を行う実践について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ESD・環境教育研究	6．最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00008932	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 戸川貴之	4．巻 18
2．論文標題 アイヌ民族の物語を高校生と読み、創作活動を行う	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国語論集	6．最初と最後の頁 172-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00008879	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 戸川貴之	
2．発表標題 アイヌ民族の物語を高校生と読む実践	
3．学会等名 全国大学国語教育学会	
4．発表年 2021年	

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 アイヌの文学作品から教材を開発する
3．学会等名 釧路国語教育学会 3 月例会
4．発表年 2023年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 アイヌ民族の物語を高校生と読む実践 途中経過報告
3．学会等名 釧路国語教育学会 1 2 月例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階に おける創作活動」について
3．学会等名 全国私学研究集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階に おける創作活動」について
3．学会等名 教育の集い
4．発表年 2022年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階に おける創作活動」について
3．学会等名 北海道合同教育研究集会
4．発表年 2021年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 アイヌ民族の物語を高校生と読む実践
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 アイヌ民族の物語を高校生と読み創作活動を行う実践 中間報告
3．学会等名 釧路国語教育学会 1 1 月例会
4．発表年 2021年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 アイヌ民族の文学を高校生と読む実践
3．学会等名 釧路国語教育学会 5 月例会
4．発表年 2021年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 ICT機器を活用した新型コロナ時代の授業 実践報告
3．学会等名 釧路国語教育学会 1 2 月例会
4．発表年 2020年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 「さけが大きくなるまで」を高校生と読む
3．学会等名 釧路国語教育学会 1 1 月例会
4．発表年 2020年

1．発表者名 戸川貴之
2．発表標題 シンポジウム 「さけが大きくなるまで」を起点に教科横断的学習を考える アイヌ研修者の立場から
3．学会等名 釧路国語教育学会 1 0 月例会
4．発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
佐野 比呂己	(sano hiromi)